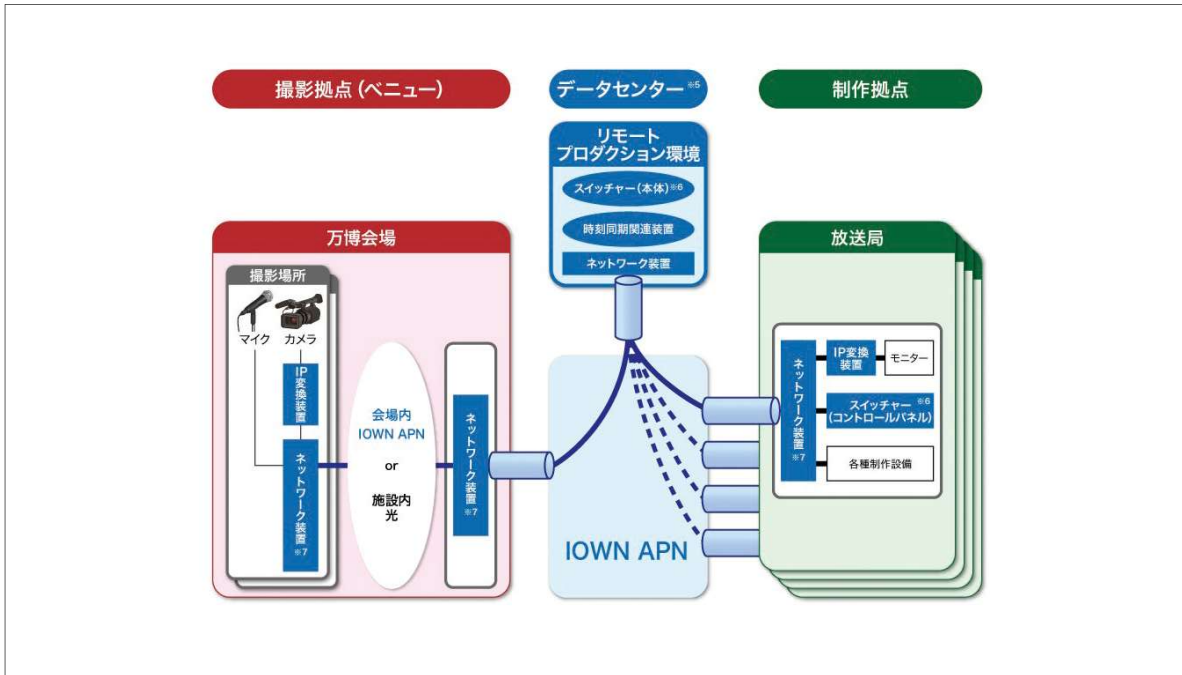


図表2-4-5 ▶万博会期中におけるリモートプロダクション環境提供イメージ



出所：NTT ビジネスソリューションズ「大阪・関西万博におけるIOWN APNを活用したリモートプロダクション環境を共同利用化」（2025年2月20日）

また展示終盤には、離れた場所同士をIOWNの光ネットワークで結び、互いの心拍を伝え合う実験装置「いのちふれあう伝話」も用意された。これはネットワーク越しに他者の鼓動や触覚情報を共有することで、人と人の命のつながりを実感させる試みである。

NTTグループは大阪・関西万博の会期中、パビリオン以外の場でも、こうした先端技術を駆使したイベントを展開した。その代表例が5月に実施された「超歌舞伎〈CHO-KABUKI〉Powered by IOWN『今昔饗宴千本桜 Expo2025 ver.』」である。超歌舞伎は歌舞伎俳優の中村獅童とボーカロイドの初音ミクが共演する先進的舞台で知られるが、大阪・関西万博ではNTTパビリオンデー（5月24日、25日）に日本と台湾を結んだ世界初のリアルタイム共演が実現した。NTTが2024年8月に開通させていた日台間のIOWNオールフォトンクス・ネットワーク（国際間APN）を活用し、大容量・低遅延の通信で夢洲の大阪・関西万博会場の舞台と台湾の会場を接続。約3,000km離れた両会場で、歌舞伎の演者（中村獅童）と台湾の伝統芸能団体（九天民俗技藝団）によるキャラクター「官將首」の舞踊を遅延を感じさせることなく同期させた。さらに日本側と台湾側の照明演出も光通信で同期させ、あたかも一つの舞台に双方の出演者が立っているかのような一体感を生み出した。

この超歌舞伎は伝統芸能と最新ICTの融合であると同時に、IOWNがもたらす超低遅延ネットワークで遠隔地を一つにつなぐ実証でもあった。NTTはこれを「国境を越えた新しいエンターテインメントの創出」と位置付けており、

通信インフラによって文化体験の共有範囲を飛躍的に拡大できる可能性を示している。

また、「リモートプロダクション」と呼ばれる放送制作手法も本格的に活用された。これは、イベント会場などの中継先と放送局をIPネットワークで接続し、放送局側から会場のカメラ等を遠隔操作して番組制作を行うもので、従来のように大規模な中継車を現地に常駐させる必要性を低減し、ワークフローの効率化とコスト削減、設営リードタイムの短縮を図る考え方である。会期中、データセンターと万博会場及び放送局を、IOWN APNの技術を活用した「All-Photonics Connect powered by IOWN」にて接続したうえで、データセンター上に制作設備を設置し、複数の放送局（日本放送協会、朝日放送テレビ株式会社、関西テレビ放送株式会社、讀賣テレビ放送株式会社）が接続できるようにすることで、リモートプロダクション環境の共同利用化を実現した（図表2-4-5）。

開幕イベント「1万人の第九 EXPO2025」では、会場内の合唱・演奏の映像と音声をIOWNで毎日放送本社へリアルタイムで伝送し、遠隔からの番組制作（リモートプロダクション）を実現した。制作されたコンテンツはTVerの特別ライブ配信等で生中継され、万博会場の“瞬間”が遅延を感じさせない形で視聴者に届けられた（図表2-4-6）。

NTTグループの大阪・関西万博への参画は、未来へのレガシー創出を強く意識したものである。NTTは大阪・関西万博テーマの一つ「People's Living Lab（未来社会の実験場）」に沿って、大阪・関西万博会場全体のデジタル基盤構築にも関与した。大阪府は広域自治体として、公民